十地思想の起源に關して

——龍山章眞著「梵文和譯十地經」を讀みて——

舟橋一哉

本書の解說を讀み乍ら氣のついた事を一つ書かせて貰ふ。それはこの書の「解說」中最初に「十地思想の起源及び其の變遷」なる一項があつて、その中に、十地經の十地思想は「般若經」の十地說と梵文の「大事」に說く十地說とより發達したものであることが說かれてゐる。般若の十地とは羅什譯の摩訶般若波羅蜜經に依れば、乾慧地、性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已作地、辟支佛地、菩薩地、佛地の十地であるが、この十地が云何にして作られたかに就いて、「解說」中には前七地と後三地とに分ち、前七地は從前の部派敎學に於ける賢聖の階位であり、後三地は三乘思想に基くものであるから、別々に發生した二つの系列を一組に連絡したるものと推定せられてゐる。私は之を讀んだ時、賢聖の階位を七つに分つことに不審を持ち、是等の解釋が久野芳隆氏の論文「菩薩十地思想の起源、開展、及び內容」(大正大學學報、第六、七輯)に負ふ所が多いとの龍山氏自らの註記に依つて、久野氏の所論を確めた所、略ほ同樣なる所說に遭遇したのである。成る程この十地說は、明に前七地と後三地とは異なつた系列に屬するものであつて、この所論には何等誤謬は無いのであるが、前七地を一列のものと見んとする所に幾らか無理がある樣に思はれる。私は最初この七地は、更に前三地と後四地とに分けられ得るものである事に氣づき、久野氏の論文を讀んで見て益々この感を深くした。卽ち前三地も後四地も共に小乘の預流、一來、不還、阿羅漢の四向四果の說に依るものであつて、この七地中にこの四向四果の名目が二度繰り返されてゐる譯である。

先づ後の四地より考察するに、薄地、離欲地、已作地

の三つの名稱が後三果の特徴を表はしてゐることは略確實と見て、見地を預流果に當てんが爲に、この「見」の梵語を翻譯名義集に依つて調べて見て darśana であることを知つた。（梵文二萬五千頌般若も同じ。）darśana は「智見」と言ふ場合の「見」であるから、邪見に對する正見を表はす言葉である。斯く見ると之は預流果の特徴を示してゐると見て差支へない。今、諸經論に出づる四果の特徴を見るならば、預流果は通常三結を斷ずると言ふ事がその特徴とされてゐる。三結とは有身見、戒禁取見、疑の三つであるが、その中有身見と戒禁取見とは巴利上座部の阿毘達磨に於ては共に邪見の內容とせらるゝことがある。（有部にては然らず。）それ故に巴利の法聚論及び分別論に於ては邪見を捨てることがこの地の特徴であるとすら說かれてゐる。して見れば預流果を顯はす言葉として「見」とか「正見」とか言ふ文字は極めて相應はしい理である。次に一來果は斷三結と言ふことゝ貪瞋癡（又は貪瞋）薄と言ふことゝが特徴とせられてゐる。斷三結は預流果と共通するから、正しくはこの地の特徴は貪瞋癡が薄いと言ふことであらねばならぬ。薄地と言ふが卽ちそれである。次に不還果に於ては通常は五下分結（三結に欲貪瞋恚を加ふ）を斷ずることゝせられてゐるが、五下分結中で三結は旣に斷ぜられてゐるのであるから、實は欲貪瞋恚の二を斷ずることであらねばならぬ。故に巴利の法聚論、分別論、に於ては欲貪と瞋恚との殘りなき斷であると說かれ、人施設に於ては貪瞋癡の殘りなき斷であると說かれてゐる。十地の中、離欲地が之に當るが、離欲 vītarāga とは決して欲貪のみを斷ずることではなく、廣く煩惱を斷ずることである。この意味に於てこの語は屢々「離染」と譯されるがこの方が嚴密に言へば正しい譯である。放光般若に於てこの離欲地が滅婬怒癡地となつてゐるのはこの場合注意を要する。最後の阿羅漢果は稀れに五上分結の斷がその特徴である樣にも說かれてゐるが、通常は諸漏已盡、所作已作云云の型を以て之を顯はしてゐるから、今、已作地を之に配するは當然である。

次に前三地は云何と言ふに、實を言へば最初の乾慧地

（又は淨觀地、滅淨地）は不明である。久野氏の言はるゝ如く乾慧の原語は śuṣka-vidarśana であつたであらうし、淨觀の原語は śukla-vidarśana であつたであらうが、何れにしてもその義が明白でない。羅什譯の般若經に相當する梵文二萬五千頌般若では、不思議にもこの乾慧地を缺き、代りに辟支佛地の前に聲聞地を加へてゐる。（この場合は言ふ迄もなく、十地の中前六地と後四地とに分けられる。）同經の西藏譯では乾慧地（實は「淨觀地」なり）も出し、聲聞地も出してゐるから、十一地になる筈であるが、文章の連絡の具合より見ると、乾慧地を除いて十地と爲すものゝ樣である。しかし性地の前に乾慧地なるものゝあることには變りがない。此の乾慧なる名稱を何と解釋するか。强ひて解釋すれば何とでも通釋することが出來るが今は避けたい。

次の性地は種性地とも言はれ、これは預流果へ入る前の位（有部では世第一法）を指すものであつて、之に就いては拙稿（宗教研究、新十二卷、第四號）があるから、參照して頂きたい。

次の八人地は八地又は第八地と言はれ、梵本も西藏本も第八地（但し西藏譯は確實には言へないと想ふ）としてゐるが、八人地とすれば解釋し易い。卽ち四向四果の八輩を言ふのである。增一阿含卷四十の次の文を見れば略明瞭であらう。有二九種之人一、可レ敬可レ貴、供レ之得レ福、云何爲レ九、所謂向二阿羅漢一、得二阿羅漢一、向二阿那含一、得二阿那含一、向二斯陀含一、得二斯陀含一、向二須陀洹一、得二須陀洹一、種性人爲レ九。

要するにこの般若所說の十地說の中前七地は、小乘經典に於て已に說かれてゐた四向四果の說を二重に應用して作り上げたものであつて、その成立を考察する場合には前三地と後四地とを切り離して考察せらるべきものと想ふ。